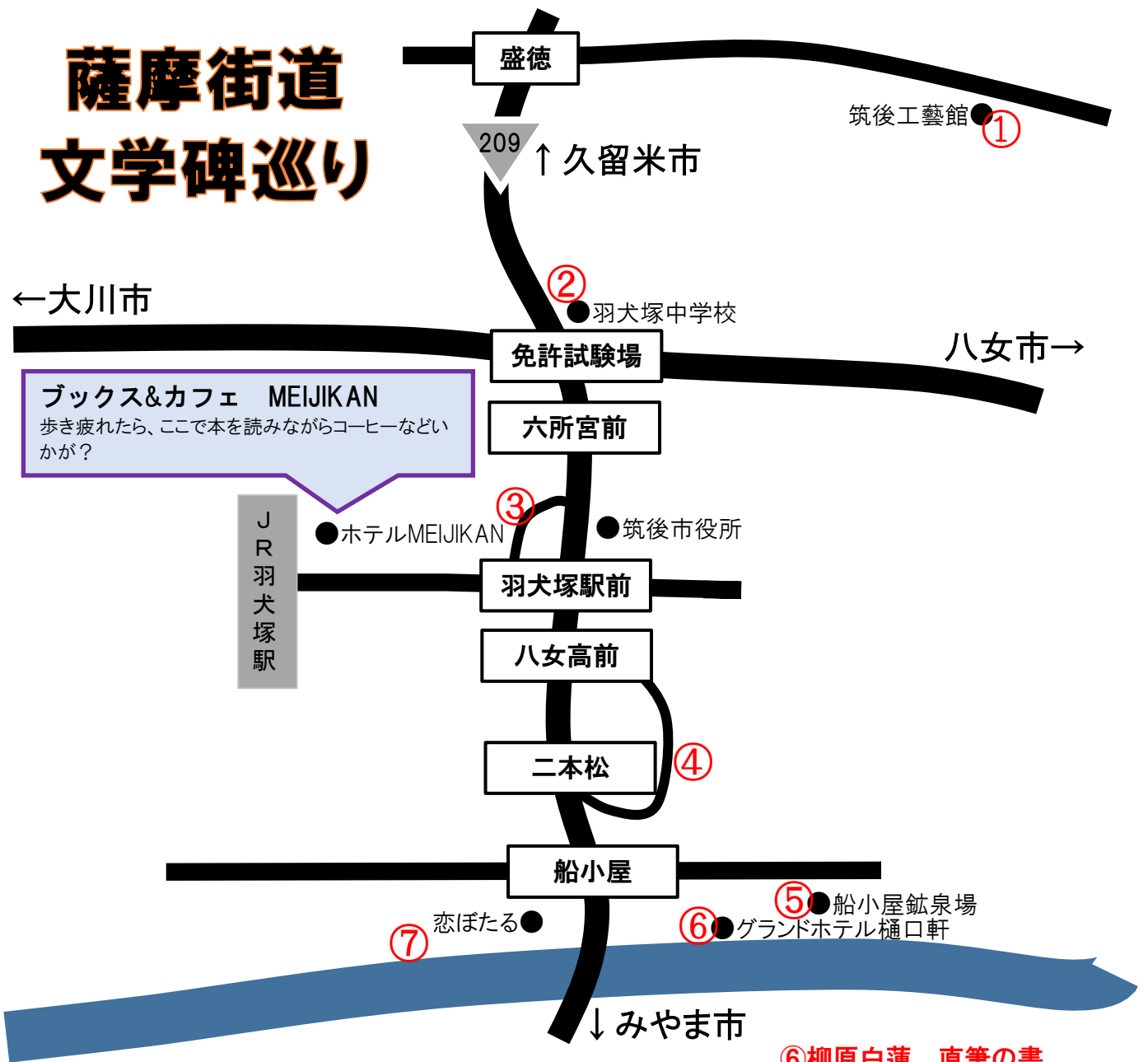


薩摩街道 文学碑巡り



① 青木繁句碑

今日明日と ただかりそめの 草枕
旅に三とせを 重ねけるかな

① 種田山頭火句碑

春風の鉢の子一つ

② 種田山頭火句碑

お経あげて お米もろうて 百舌鳴いて

③ 種田山頭火句碑

さうらうとして けふもくれたか

④ 種田山頭火句碑

うらかな 今日のみだけはあ

⑤ 夏目漱石句碑

ひやひやと 雲が来るなり
温泉(ゆ)の二階

⑥ 柳原白蓮 直筆の書

見ゆる計は 湯ふねのうへに うこくなり
五月のそらと わかはのみとりと

⑥ 種田山頭火句碑

雲の如く行き 水の如く歩み
風の如く去る

⑦ 尾上紫舟歌碑

湯を出でて ひらく浴衣の 襟もとに
蛍吹き入る 楠の夕風



青木繁

明治時代の天才画家・青木は、久留米から母の実家・八女に通うため、筑後路を通いました。僅か29歳の生涯を閉じる直前に詠んだ句です。



夏目漱石

1896年春に熊本の高校に赴任することになり、結婚したばかりの夫人を連れて船小屋で一泊しました。この時に詠んだ句を正岡子規へ送ったそうです。



種田山頭火

1930年、当時48歳の山頭火は托鉢の旅に出て、筑後市・羽犬塚宿に宿泊します。旅路に詠んだ句は「行乞記」に記されています。



柳原白蓮

NHKテレビドラマ「花子とアン」に登場する白蓮は、大正から昭和にかけて活躍した歌人。晩年は樋口軒に何度も宿泊し、風景を歌にしました。



尾上紫舟

1939年、当時63歳の紫舟は船小屋を訪れ幾つかの歌を残しました。歌人・書家・国文学者など多彩な顔の持ち主です。

